

行動に課題のある方への支援に より高い専門性を

— 市内で安心して暮らし 自立を目指すために —



静岡市強度行動障がい者支援施設等サポート事業
成果報告書

令和3年3月
発行 静岡市

目 次

はじめに	2
------------	---

静岡県強度行動障がい者支援施設等サポート事業とは	3
--------------------------------	---

入所施設サポートの取組

宍原 荘（社会福祉法人 玉柏会）	6
------------------------	---

わらしな学園（社会福祉法人 静岡県厚生事業協会）	15
--------------------------------	----

通所施設サポートの取組

ラポールみなみ（社会福祉法人 静岡手をつなぐ育成の会）	23
-----------------------------------	----

あすたす（特定非営利活動法人 P O P O L O）	28
-----------------------------------	----

もえり清水（特定非営利活動法人 もえり）	31
----------------------------	----

やんちゃりか（特定非営利活動法人 たからじま）	33
-------------------------------	----

コンサルテーションで見えてきた強度行動障がい支援のまずはここ！

自閉症教育・支援コンサルタント <small>みずの あつし</small> 水野 敦之 (入所施設サポート コンサルタント)	36
---	----

おわりに	42
------------	----

はじめに

「行動障がい、どのように支援すればいいの？」

行動に課題のある方への支援について、悩んでいる障がい福祉施設職員の方は多くいるのではないのでしょうか。

各都道府県によって「強度行動障害支援者養成研修」が実施されるようになり、年々研修回数を重ねる中で、静岡市内においても行動障がい支援に取り組む施設・職員の方は増えてきました。

噛みつき、頭突きなどの他害行動や自傷行動がある強度行動障がい※1は、支援方法が難しく、全国的にみても、受入に消極的な障がい福祉施設も多くある状況です。また、強度行動障がい児者を受け入れている施設においても、**適切に支援できず問題行動を悪化させてしまう、問題行動を抑えるために身体拘束や行動制限などの虐待に繋がる**という例もあり、支援者の養成が課題となっています。

強度行動障がい児者は、本人の障がい特性などによる他者とのコミュニケーションの困難さから問題行動をとる場合があります。ご本人が安定した生活を送れるようにするためには、支援者による丁寧なアセスメント※2、環境やコミュニケーションのあり方などを整える地道な作業が必要になります。

本冊子は、静岡市が支援者養成のために平成28年度から実施している「**強度行動障がい者支援施設等サポート事業**」にご参加いただいた各施設の取組とその成果をまとめたものです。環境の整え方、スケジュールの作成、活動の設定、職員同士の協力体制など、様々な視点から執筆いただきました。

↓強度行動障がい者支援施設サポート事業の様子



これから行動障がい支援に取り組まれようとしている施設の方、行動障がい支援にどのように取り組んでいいかわからないという施設の方にとって、専門的に支援に取り組む必要性を感じ、支援のヒントが見つかる内容となっています。また、既に行動障がい支援に積極的に取り組んでいる施設の方にも、参考となる内容になっています。

ぜひ本冊子がきっかけとなり、行動障がいのある方々への支援がさらに充実したものとなるよう願っております。

令和3年3月 静岡市 障害福祉企画課

※1 **強度行動障がい** 直接的他害（噛みつき、頭突き等）や、間接的他害（睡眠の乱れ、同一性の保持等）、自傷行為などが通常考えられない頻度と形式で出現し、家庭での通常の育て方をしてかなりの養育努力があっても著しい処遇困難が持続している状態。

※2 **アセスメント** 指導・支援に必要な情報を観察などで調べること。

静岡市強度行動障がい者支援施設等サポート事業とは…

静岡市では、障がい福祉施設などにおいて行動障がいの支援者を養成するため、アドバイザーやコンサルタントを派遣する「強度行動障がい者支援施設等サポート事業」(サポート事業)を平成28年度から実施しています。

↓サポート事業の様子



▶ 事業の経緯

平成25年度、静岡市障害者自立支援協議会※3にて、行動に課題のある人への支援が議題として取り上げられました。

当時、児童福祉法の改正(平成24年4月施行)により、原則18歳以上の障がい児施設入所者は施設を退所して地域に戻ることとなりました。しかし、静岡市内では、行動障がい支援や自閉症支援に積極的に取り組む施設は不足しており、行動障がいのある方の受入体制が整っていない状況でした。そのため、適切に支援できる支援者や施設を増やし、行動障がいのある方が安心して暮らせる地域を目指して、サポート事業を開始することとなりました。

▶ 事業の内容

サポート事業は、次の3つの内容で構成されています。

入所施設サポート(詳細は5ページから)

市内障がい児者入所施設にコンサルタントを派遣し、強度行動障がい支援に関する助言や支援に必要な知識、技術についての研修などを実施します。

↓サポート事業の様子



コンサルタントは、自閉症教育・支援コンサルタントの水野^{みずの}敦之^{あつし}氏です。

平成29年度から「宍原荘(社会福祉法人玉柏会)」、平成30年度から「わらしな学園(社会福祉法人静岡市厚生事業協会)」が事業を開始し、令和2年度現在まで実施しています。

※3 **静岡市障害者自立支援協議会** 障がいのある方への支援体制整備を図るため、学識経験者、相談支援事業者、障がい福祉サービス事業者、保健・医療関係者、教育関係者、雇用就労関係者、障がい者関係団体者等により構成された協議会。相互連絡により地域課題の情報共有、連携の緊密化を図り、地域の実情に応じた体制整備について協議を行う。

通所施設サポート（詳細は22ページから）

市内障がい児者通所施設などにアドバイザーを派遣し、強度行動障がい児者に対するアセスメント、支援方法、環境調整などについて助言します。

〈派遣実績〉

申請者	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
放課後等 デイサービス	3 か所	1 か所	5 か所	3 か所	5 か所
生活介護	2 か所	-	1 か所	-	1 か所
就労継続支援 B型	4 か所	2 か所	2 か所	4 か所	2 か所
特定相談支援	-	-	-	-	1 か所

事例検証会

支援者のスキルアップや事業周知に繋がるよう、入所施設サポート、通所施設サポートの事例報告、発達障がい・自閉症支援に関する講演会・ワークショップを実施しています。

↓ワークショップの様子



〈開催実績〉

日程	イベント名	内容	参加人数
H29. 2. 10 - H29. 2. 11 9:30-16:30	フレームワークを 活用した自閉症支援	○講演 第一部「自閉症の特性と行動支援フレームワーク」 第二部「自閉症の特性と自立支援フレームワーク」 ○ワークショップ	延べ249人
H29. 7. 11 H29. 7. 14 10:00-12:00	検証会・事業説明会	○事例報告 ○事業説明	延べ51人
H29. 12. 1 - 12. 2 9:00-16:30	フレームワークを 活用した自閉症支援	○事例報告 ○講演 第一部「自閉症の特性について」 第二部「自閉症の特性と行動支援フレームワーク」 ○ワークショップ	延べ281人
H30. 3. 16 9:30-12:00	発達障害の特性と 支援	○事例報告 ○講演	55人
H30. 12. 21 - 12. 22 9:30-16:30	フレームワークを 活用した自閉症支援	○講演 第一部「活動の設定と支援」 第二部「行動支援と環境設定」 ○ワークショップ	延べ372人
R1. 10. 11 10:00-16:00	発達障害の特性と 支援	○事例報告 ○講演 第一部「発達障害の特性と支援」 第二部「フレームワークを活用したアセスメントと プランニング」	延べ234人
R2. 2. 19 10:00-16:00	発達障害の支援	○ワークショップ 第一部「本人を理解するためのアセスメント」 第二部「活動の自立を支援する」	延べ78人

入所施設サポートの取組

① 宍原荘

(社会福祉法人 玉柏会) 6

② わらしな学園

(社会福祉法人 静岡市厚生事業協会) 15

① 宍原荘 (社会福祉法人 玉柏会)

▶▶ 宍原荘のご紹介

宍原荘では、6つのユニットによるケアを実施しており、画一的な支援ではなく、障がいのある方々それぞれが望んでいる暮らしをサポートすることを目指しています。

常に支援を必要とする方に対して、日中は、日常活動の支援や生産活動、創作活動の機会の提供、及び身体機能回復や体力維持のために必要な支援を行っています。

また、買い物、外食、映画鑑賞や、年中行事、地域イベントへの参加など、その方の意思や希望に沿った時間が過ごせるよう支援しています。



▶▶ 宍原荘 施設長より

静岡市の本事業に参加して以降、4年間に渡り、水野敦之先生には毎回熱心な御指導をいただき、大変感謝致しております。基礎知識の習得や、数多くの現場でのコンサルテーションを通じて、自閉症支援のフレームワークの視点で思考する習慣が身につき、成果があがってきたことを実感しています。

当法人では、開始当初はコアメンバーと称する8名の職員が集中して学習し、理解を深めてまいりましたが、この手法を多くの職員が習得できるよう、第2ステップとして平成31年3月に「自閉症研修チーム」を発足させました。このチームはコアメンバーにて構成され、その目的は、彼らが得た知識や技能を広く法人内に展開し、多くの職員の自閉症支援の専門性を高めることにあります。

現在、宍原荘内を始め、法人内の他事業所においても内部研修を重ねており、理解が徐々に深まってきました。これからも研修を継続し、より多くの職員が支援の専門性を高めていくことが、地域のご利用者の「自立」に一步一步つながっていくのだと思います。今後とも、わらしな学園様とも切磋琢磨しながら、専門性を高め、ご利用者の質の高い生活づくりを目指していきたくと考えています。

▶▶ 入所施設サポートを受けたきっかけ

平成27年2月、宍原荘に対して、知的障がい児入所施設から強度行動障がいがあるAさんの受け入れをお願いしたいと打診がありました（児童福祉法の改正により）。

当時の宍原荘では、平成7年の増床時に自閉スペクトラム症を伴う知的障がいがある方が入所され、強度行動障がいがある方もいらっしゃったものの、昔ながらの集団支援が主で、個別の特別な支援は行っていませんでした。

Aさんの受け入れについては、1年後の入所を目標としました。

まずは、Aさんに宍原荘の様子や日課を知っていただくため、来荘し、体験してもらうことになりました。

初回、活動後に昼食として外でラーメンを食べるという楽しみを目的にもって、Aさんと児童施設職員が来荘しました。

しかし、宍原荘に入る玄関前でAさんは不穏になり、落ち着けるよう一度バスに戻りました。（タイムアウト）

その後、児童施設での取組として行っていたホワイトボードを利用して指示をし、Aさんは、グラウンドを何周か歩きましたが、途中で再び不穏になり、支援途中で帰ることになりました。

この状況を体験して

- ➡ **これまでの支援方法では対応できないのではないか？
強度行動障がいがある方への対応を今後どうしていったら？**
- ➡ **今までの支援方法だとご利用者に待っていただく時間が多いので、
活動がもう少しあっても…**
- ➡ **自閉スペクトラム症があるご利用者へ、予定変更などの説明を混乱なく
伝えるにはどうしたらいいのかわからない**

という不安が出てきました。

そこで、誰か専門的に自閉スペクトラム症を支援されている方に教えてもらえたら良いのではないか？

と、コンサルタントを紹介していただくことになりました。

自閉症教育・支援コンサルタント 水野 敦之 氏

▶ コンサルテーションの流れ

最初の1年目は、

- ① **コンサルタントに実際の支援状況を説明しながら、アドバイスをいただくこと**
- ② **基本的な自閉スペクトラム症及び強度行動障がいについての基礎知識を講義形式で教えていただくこと** を進めました。

2年目からは、次の6つの手順でコンサルテーションを進めていただきました。

① アセスメント

ご利用者・対象者を知ることから学びました。

アセスメントは、ご本人が持っているスキルを支援者が適切に知ることです。

実際に目の前でコンサルタントがご利用者をアセスメントしている場面を見ることができました。アセスメントの中で当時スタッフも知らないご利用者のスキルが表れ、ただただ驚きでした。

② 障がい特性を学ぶ

「障がいは脳の機能障がいに起因するもの」と捉え、多様な行動は障がい特性によって引き起こされるものと、機能的に捉えることが基本になります。

コンサルタントから障がい特性を細かく教えていただきました。実践を通じた事例も多く教えていただき、支援者としてはとてもわかりやすかったです。

③ ワークシートを活用した実践

フレームワーク※4の核となる部分、「フレームワークシート」をスタッフ全員で共有することで一貫した支援を目指しています。コンサルテーションを受けてからはシートを活用して支援の組み立てをしています。

④ 実践発表

コンサルテーションではご利用者に対する実践をフレームワークシート+動画で発表します。サポート事業を受けている事業所は全て同じシートを活用しているので、参加者全員が理解できる内容になっています。

⑤ 評価

実践に関してコンサルタントから評価していただきます。シートの書き方や視点の持ち方、指示の出し方、指示カードのサイズなど細かい点についてもアドバイスしていただけます。

⑥ 再構造化

コンサルタントからのアドバイスを参考に、支援の再調整を行います。これを再構造化といえます。コンサルテーションでは以上の流れを繰り返し行い、支援の底上げを目指します。

※4 **フレームワーク** フレームワークを活用した自閉症支援:書籍「フレームワークを活用した自閉症支援」(水野敦之著・エンパワメント研究所)を参考にした支援。

▶ コンサルテーションの様子

最初は、コンサルタントの説明がよくわからない職員もいましたが、

- ① **アセスメント**を通してご利用者のできること・わかっていることを探る
- ② **アセスメント結果**から課題やスケジュールを作り、**実際にご利用者に教える**
- ③ **活動に取り込む** ということを進めていくことで、施設の中の構造化が進み、ご利用者が落ち着いて過ごせるようになっていきました。

《構造化の評価の場面》



机をこんな形にすると
支援しやすいよ

《取組の説明の場面》



この活動を他の方が気にならない形で
取り入れています

《講義の場面》



ご利用者への指示をするとき、
どの手がかりを使ってわかって
もらえるようにしますか？

《視覚的構造化の講義の場面》

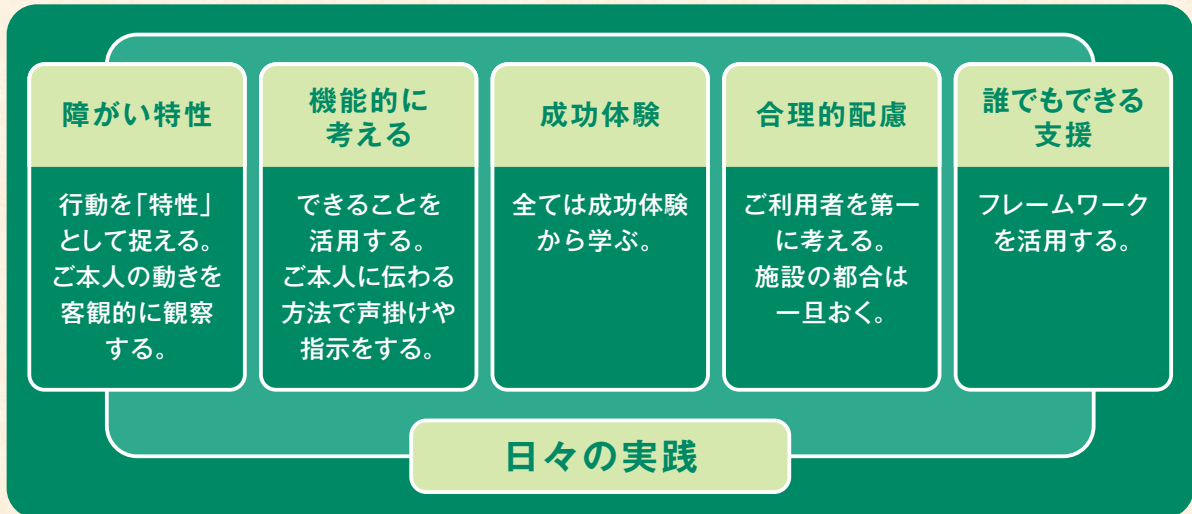


《コンサルタントが作成したアセスメント材料》



▶ コンサルテーションから学んだ視点

コンサルテーションを通して、次の5つの視点をもって日々の支援を実践していくことが大切だと実感しました。



実行することによる効果・変化したこと

○ 活動を豊富にすることで他害行為が減る→他のご利用者も安定。

周囲のわからないことへの不安から生じる他害行為が減り、ご本人も他のご利用者も安定しました。

○ ご利用者の自立を体感できた→支援者が楽になった。

ご利用者が自立をすることで支援する量が減りました。また、自分の支援でご利用者が自立する嬉しさも見つけられました。

○ まずはじめないと、何も変わらない。

頭の中で考えていても何も進みません。まずはやってみる、という支援体制ができました。

○ 障がい特性を機能的にみられるように変化→虐待防止に繋がる。

何でもできるようにさせよう・こうでなければならないという気持ちを抑えて支援していくことができるようになりました。

○ 過度な支援はしない（クールな声掛け、依存しない・させない）。

ご本人がわかりやすい指示を心がけることで、余計な指示出しでご本人を混乱させてしまうことが少なくなりました。ご本人も見通しが立ちやすくなり、ご自身で行動できることが多くなりました。

▶ 具体的な取組の紹介（コンサルテーションでの学びからの変化）

コンサルテーションを通して、実際に支援がどのように変わったのか、取組の一部をご紹介します。

1 アセスメントからはじめる

自閉症支援を組み立てていくにあたって、まずご利用者を「アセスメント」することが根付きました。



コンサルタントからは、日常の支援の中で観察して行う**インフォーマルアセスメント**を学びました。一貫性のある視点を保つため、宍原荘ではコンサルタントが作られた**フレームワークシート**を活用させていただいています。

2 環境の変化

以前はご利用者が**集団**で動いていました。

写真の様にご利用者に集合していただき、ひとつのスペースで活動をしていました。



コンサルテーションを受け、集団活動から脱却し、**個別活動**を意識するようになっていきました。個別の活動・場所を用意し、集中できるように間仕切りなどで環境を整えていきました。



3 見通しをもっていただくことを意識する

ご利用者が自分で気づいて、自分で実施する自立の基本をコンサルテーションで学びました。

今まで私達は「声掛け」のみの支援でしたが、ご利用者が理解できる方法でお伝えし、見通しを持っていただく「スケジュール」を作りました。

右の写真は「絵」で情報を理解される方へのスケジュールによる指示です。

上から下に活動が進んでいきます。例えば一番上の机のカードは「自立課題※5」を示します。ご利用者がこのカードをとり、活動場所へ移動します。



活動場所には、何種類もの自立課題が置いてあります。その棚の横には、実施する自立課題を示したカードが貼られています。

① 同じカードが貼られている下にスケジュールからとったカードを自身で貼ります。

② 実施する自立課題の順番を示しています。上から下に進めていきます。



③ 同じカードの自立課題をご本人が探し、カードをケースに貼り付けて自立課題スタートです。

このような活動を作る際には、ご本人が理解できるものを提示することに気をつけています。

アセスメントでは、ご本人が「できること」「できたり、できなかったりすること」「できないこと」を評価します。

自立課題を作る際には、ご本人が「できること」を活用し、「できたり、できなかったりすること」を課題にします。「できないこと」は課題にはしません。「できないこと」は支援が必要な部分です。

このようにコンサルテーションを通して、支援者は「機能的」に考えるようになってきました。

※5 **自立課題** 一人で取り組み、指示や支援を受けずに完成できる課題のこと。

▶▶ 支援に自信が持てるようになりました

コンサルテーションを受ける前、宍原荘の職員は、精神論で「みんなで統一した支援を目指そう」としてきました。

現在は**フレームワークの視点**で支援を行っています。

確固たる考え方を学ぶことは、ご利用者にとってはもちろんのこと、私達支援者にとっても良い効果があります。**支援に自信が持てます。**

共通したシートを作成し、共通した言語を使い、共通した支援に取り組む。

支援者全員がフレームワークシートや共通したアセスメント道具を活用することで、共通した意識や姿勢、また知識になっていると実感しています。

現在のやり方の方が、最終的に統一した支援になるのではないかな？と感じています。

当初はシートに記入して支援を展開していく文化がなく、正直抵抗がありましたが、たくさんシートを書いているうちに情報が整理されていくことに気づきました。

また、宍原荘においても改善していきたいことですが、担当制などがあると、ご利用者に対しての支援が、いつも同じ支援者というケースが多々あります。

支援計画は担当者が作り、他の支援者の意見が介入できない場面もあるため支援にばらつきがでてしまいます。

実際に経験しましたが、自閉症の方は人に対して強い依存傾向がある方もいらっしゃるので、支援者を固定せず、できるだけ何人かの支援者で支援を行うようにし、共生を避けた方が良いと思います。

そのためにも、ご利用者を客観的にアセスメント、評価できるシートはとても重要だと思います。

自閉症の方々に対しては必ず

いつ・どこで・何を・どのようなやり方で・どうなったら終わりなのか・終わったら次に何があるのかを繰り返し考えていき、この情報を個別化して情報提示していくことの大切さと難しさを感じています。

宍原荘の支援を少しご紹介させていただきましたが、4年前の宍原荘と比べると、はっきり言えますが、支援の状況・環境は激変しています。

いま現場では支援に対して毎日話し合いながら支援の組み立てをしています。協議する内容は水野先生から学んだことがベースになっているため、考え方が統一されています。

とても支援しやすい環境です。

(宍原荘 職員の声)

▶ コンサルタント 水野 敦之 氏より

コンサルテーションを続けてきて感じる宍原荘さんの強みは、まじめさとポジティブさのように感じます。一貫した利用者の支援を目指す宍原荘さんは、コンサルテーションに入る前からも様々な研修で見よう見まねで構造化の実践をされていました。やれることはやるという視点で必要だったのは基本でした。どんなに構造化をしても基本がぶれるとうまくいきません。コンサルテーションを通して基本と実践を繰り返すことで普段の支援が変わってきます。宍原荘さんの強みに基本が加わることで利用者に良い影響（効果）をあたえ、そして関係のある支援者に良い影響を与えていると思います。

今後は、宍原荘さんが静岡市の様々な施設にとって「基本に基づく実践を学ぶモデル」であることも意識し、1つ1つのケースの取組を大切にしてほしいと思います。

< コンサルタントから助言を受け、宍原荘で作成した自立課題の一部 >

➡ 数字が書かれている瓶に同じ数字のボールを入れる課題



◀ 写真見本と同じピックを箱に入れる課題



➡ 半分にカットされた野菜・果物の絵のカードを洗濯ばさみでつなぎ合わせる課題



◀ 台紙に印刷された色に合わせて、洗濯ばさみをつける課題



サポート事業とは

入所施設サポート

通所施設サポート

強度行動障がい支援の
まずはここ！

② わらしな学園 (社会福祉法人 静岡市厚生事業協会)

▶ わらしな学園のご紹介

わらしな学園は、2棟に分かれている建物の構造を生かし、年齢や性別ではなく、適性に応じた支援など共通するニーズに基づき暮らす場所を区別することで効率よく支援できるようにしています。



日中活動としては広々とした作業棟と、天井が高く窓の多い開放感があるプレイルームを利用して、作業訓練や美術・音楽などの創作活動の場を提供しています。また、体力づくりを兼ねて、同施設が立地する中山間地の自然豊かな静かな環境の中を散策することも、利用者の皆様の楽しみの一つです。そのほか、施設を会場にして行う盆踊りや運動会は、地域の方との大切なふれあいの場となっています。このようにわらしな学園では利用者目線に立ち、個人個人のペースを尊重した支援に心掛けています。

▶ わらしな学園 施設長より

静岡市厚生事業協会は、平成30年度より本事業に参加させていただき、この間、水野先生には数知れないご助言を賜りましたことを厚く感謝申し上げます。

わらしな学園は、長く静岡市の指定管理施設として運営してまいりました。近年は特に行動障がいの方のセーフティーネットの役割を担っておりますが、従来の療育指導の枠にはまらない特異な行動特性を示す利用者に対して、有効な支援方法がわからず試行錯誤を続けております。そのような時に静岡市担当課からの「強度行動障がい者支援施設等サポート事業」へのお誘いは、願ってもないチャンスでした。

そして3年経ち、新館の利用者への支援として始まったサポート事業から得た新たな取組は、現在本館利用者にも広がり、確かな手ごたえを感じ始めております。例えば、これまで栄養士が頭を痛めていた食器の破損が今ではめっきり減るなどその効果は確かなものとなってきております。食器の破損などは小さなことではありますが、このような小さなことでも彼らの自立を妨げる一因であることは明らかです。彼らが未来につながる大きな一歩を踏み出したことに施設長として大変喜んでおります。

結びに、本事業に関わる機会を与えてくださいました静岡市そして懇切丁寧にご指導いただきました水野先生には深く感謝申し上げます。今後におきましても、利用者の自立と生活の質の向上を目指して皆様と共に手を携えて歩んでいければ幸いです。

施設長 糟谷 幸伸

▶ 3年間の取組を振り返って

わらしな学園では近年、激しい行動障がいを伴う自閉症の方の入所が増え、当初は、自傷や他害、器物の破壊などの問題行動を目の当たりにし、支援員はどのように対応すべきかわからず試行錯誤していました。

自閉症支援については、かねてよりSPELL（構造化、積極アプローチ、共感、低刺激、連携を意味する英語頭文字）の方法論を学んでいましたが、総論的には理解できても具体的にはどのようなことを行っているのかわからず悩んでいました。ちょうどそのような時期に静岡市から「サポート事業」への参加のお誘いをいただきました。

この事業の講師である水野先生の構造化理論である「**フレームワークを活用した自閉症支援**」は、私たちにとって耳新しい言葉でしたが、これが自閉症支援へのアプローチのカギであろうということで、まずはプロジェクトチームによる試行から始めました。平成30年のことです。

サポート事業2年目 対象者Bさんへの支援を進めて

結果が出るようになったのは2年目の夏になってからでした。

実践の取組は、18ページ以降の『Bさんの構造化支援について』にまとめています。

私たちはBさんの観察を重ねることにより、Bさんが他害や破壊行為からパニックを起こしてしまうのは、**先の見通しがわからない不安が原因なのだろう**と仮説を立てました。しかし言葉ではなかなか伝わらないのも事実です。そこで言葉に代わる何かが必要と考えました。

さらに観察を続けると、Bさんがカレンダーに興味があること、チラシをみてハンバーガーを欲しがることがわかり、これらもヒントになるのではないかと考えました。

そこで、**言葉に代わる「言語」として、写真やイラスト、図形等の視覚情報を駆使したコミュニケーションをとることを**試みました。

具体的には日程を伝えるための**写真を使ったスケジュール表の作成、余分な刺激で気が散らないようにするためのパーテーション設置、自らやりたい余暇活動を選択できるチョイスボードの工夫、落ち着いて外出を楽しむための行程表の作成**などです。

この方法に手ごたえを感じた私たちは、安全面から、自室でしか食事がとれなかったBさんを食堂に誘ってみました。これについても綿密なスケジュール設計と、念のため必要最小限のパーテーションによる刺激遮断を伴いながらの試みです。するとBさんは、私たちの不安をよそにゆっくりとお食事を楽しみ、なんと食べ終わった食器までも実に丁寧に食器を洗うシンクに入れてくれるではないですか。かつてバンバンと食器を叩き壊しては泣き暴れていた姿はもうどこにもありません。

このように、水野先生が教えてくださった『「**フレームワークを活用した自閉症支援**」 = 「いつ」「どこで」「何を」「どのようなやり方で」「どうなったら終わりののか」「終わったら次に何があるのか」という情報を、利用者の特性にあわせ、**整理して伝える方法**』が障がい者支援にとって非常に有効な手段であることを、私たちは具体的な事例を通して実感しています。

今後、この実践によって得られた成果を、他の利用者の皆様の支援に活かし、さらなる障がい者支援の向上を目指してまいります。

結びに、私たちを懇切丁寧に教え導いてくれた水野先生を始め、学習の機会や会場手配などの取り計らいをしていただいた静岡市の担当者様、誠にありがとうございました。

《サポート事業の様子》



▶▶ Bさん(20代男性 自閉症 強度行動障がい)の構造化支援について

Bさんの支援について、実際に構造化支援で作成し、使用したツールの一部を紹介します。

スケジュールボード

活動の見通しを視覚的に提示します。Bさんは写真の理解ができるため、写真カードを使い、確認し、活動を実施した後、裏返す形式を取っています。



チョイスボード(余暇)

スケジュールの中に余暇の選択カード(星形)を入れ、チョイスボードで自分の好きな余暇活動を選びます。「やりたくない」を示す×カードもあり、コミュニケーションツールとして使用しています。最初は四角いカードを使っていましたが、Bさんがスケジュールボードの写真カードと区別がつかなく混乱してしまったことがあり、○型に再構造化したところ、混乱がなくなりました。



1対1エリア

支援員と1対1で、アセスメントや新しい課題を実施する場所として設定しています。



自立エリア

支援員と1対1で課題などを実施し、できるようになったら、一人で自立して作業などを行う場所として設定しています。



ワークシステム ※6

一つの場所でいくつかの作業を行う際に使用しています。Bさんは記号のマッチング※7ができるため、ホワイトボードの記号（自立エリアの正面に設置）を見て、同じ記号の引き出しから自立課題を自分で出し作業をする形式を取っています。



自立課題 動物絵合わせ

動物の絵を並べて完成させる課題です。

- ① 一体型にし、視覚的に整理しています。置くカードにベルクロ※8と枠線をつけましたが、本人の中でカードの位置が定まらず、不穩になることが多く見られました。
- ② 再構造化し、本人が置くカードの場所はカットアウト※9にし、位置がずれないようにしたところ、この作業中の不穩は見られなくなりました。



また、絵を交替できるように、元のカードにはベルクロをつけ、パターンを変えられるようにも改善してあります。

自立課題 ビーズ並べ

写真見本のとおりビーズを並べる課題です。

- ① Bさんは写真見本で作業自体はできたのですが、ビーズの数が多すぎたこと、小さく掴みにくく落としやすいことから不穩になることが見られました。
- ② 再構造化し、視覚の整理のためプレートに一体型※10にし、ビーズを掴みやすく転がらないようにしたところ、不穩な状態がなくなりました。



※6 **ワークシステム** 取り組む一連の課題を視覚化し、示したもの。

※7 **記号のマッチング** マッチングは、その情報を元に同じものだと判断できること。Bさんは、記号の見分けがつき、同じ記号のものを探することができるため、ワークシステムに「記号」を使用している。

※8 **ベルクロ** 面ファスナーの一種。布に特殊な加工をし、面的に脱着可能なファスナー。よく知られる商標として、マジックテープがある。

※9 **カットアウト** 台紙にカードの形に切り込みを入れ、型はめパズルのようにぴったりはまるようにしたもの。

※10 **一体型** 材料や道具をその都度配置しなくてもいいよう、台紙やプレートに貼り付けた状態。この課題では、写真見本、ビーズ入れ、ビーズをはめる型を白いプレートに固定している。

自立課題 ストロー挿し

同じストローを穴に入れる課題です。

- ① 一体型にしましたが、ストローが入れやすいように、挿すケースを取り外し式にしたところ、ケースが外れることが逆に気になり不穩になることが多く、またストライプのストローでのマッチングが難しかったようで、作業自体がうまくいかない状態でした。
- ② 再構造化し、ケースを固定し、ストローの色をわかりやすくしたところ、不穩にならず作業ができるようになりました。



空き缶作業

他利用者と作業をしていく中で不穩な様子が見られたため、皆が作業する場所の中で、Bさんの作業場所を自立エリアにしました。また、作業工程を写真見本で示し、左の四角いボックスに入っている缶を潰し、右のカゴに入れる工程として、作業の終わりをわかりやすくしたところ、スムーズに作業ができるようになりました。



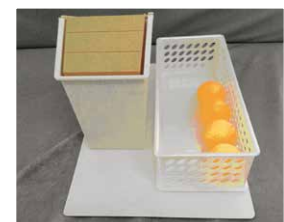
外出時のスケジュールボード

Bさんはハンバーガーが好きで、支援員とお店に外出する機会が増えてきたのですが、お店に着くまでの間に不穩になることが見られていました。そのため、道中の目立つ建物などの写真を行程表にし、その場所が見えたらカードを裏返す形にし、ゴールのお店までの行程がわかるように設定したところ、不安が少なくなったようで不穩も少なくなりました。



ウォーキングツール

Bさんはウォーキングが好きな様子なのですが、途中で不穩になってしまうことも多く見られました。あと何週歩くのか終わりが見えないことで不安を感じていると考え、園庭を一周回ったら、ピンポン玉を箱に入れていくツールを作り、ピンポン玉が無くなったら終わりとし、あとどれ位回るのが先の見通しと終わりをわかりやすくすることで、以前よりもウォーキングがスムーズにできるようになりました。



▶ コンサルタント 水野 敦之 氏より

こんなことを言うのは適切ではないかもしれませんが、最初わらしな学園さんにコンサルテーションに入った際、強度行動障がいの厳しい状況を見て、何から始めていけばいいのか茫然としてしまいました。

しかし、わらしな学園さんの良いところは、こちらが提示した課題に真摯に取り組むことでした。コンサルテーションの時に毎回、こちらがスーパーバイズをすると休憩時間にはすでに現場でどうするかディスカッションをされるのです。今回の実践資料を見てもコンサルテーションを通してアセスメントを細かく丁寧にされ、うまくいかない部分があっても調整しながら進めることで、小さな成功体験を支援者も利用者も積み重ねてられました。

今後も、すごく見栄えの良いアイデアや大きな変化を求めるのではなく、1つ1つを丁寧に実践されるといいかなと思います。

通所施設サポートの取組

① ラポールみなみ

(社会福祉法人 静岡手をつなぐ育成の会) 23

② あすたす

(特定非営利活動法人 POPOLO) 28

③ もえり清水

(特定非営利活動法人 もえり) 31

④ やんちゃりか

(特定非営利活動法人 たからじま) 33

① ラポールみなみ（社会福祉法人 静岡手をつなぐ育成の会）

▶ 事業所の基本情報

事業形態	就労継続支援B型	定員	20人
------	----------	----	-----

▶ 対象者（Cさん）の基本情報

性別	男性	年齢	20代前半
----	----	----	-------

月の契約日数	23日	月の利用日数	23日
--------	-----	--------	-----

事業所の利用年数（サポート事業利用開始日時点）	2年
-------------------------	----

課題となっていた行動

日頃から周りのいろいろなものに興味を持って突発的な行動を起こすことがよくありました。衝動的に相手に向かってツバ吐きを行う、事業所の備品を投げつけて破壊する、突然大声を出して興奮状態になった際に他害行動（周りの人をつねったり、噛みつくなど）や、周りの物を投げつける行動を起こしてしまうといったことがエスカレートするようになっていました。

▶ 通所施設サポートについて

サポート利用期間 1年6か月（令和元年7月3日～令和2年12月末）

サポートを受けようと思ったきっかけ

Cさんの行動により、他の利用者も不安定になって連鎖反応を起こしてしまうことや、事故につながってしまうことが多くなっており、そのことに対する効果的な支援方法がなかなか見つからない状況でした。日中に事業所でCさんが気持ちを安定させて過ごしていくための支援方法を検討するための助言を受けたく、サポート事業の申請を行いました。

サポートの経過

基本的には日々の記録をとりながら、その問題行動が起きる要因を分析して支援方法を考えて進めていきました。**問題行動が起きるときの機能**としては主に、①**要求行動**、②**回避行動**、③**注目行動**、④**自己刺激**の4つの機能に分類されることが多いので、どの機能によって起きているものなのか、また時間帯やその前後にあったことなどを通して、**その行動が起きる要因や条件になっているものが何か考えていきました**。また、安定剤の定期的な服薬を始め、興奮時に処方する薬を事業所で預かっていたときには服薬と行動の関連性も記録していきました。

支援環境の改善

移転前の事業所でCさんが好んで座っていた席は全体が見渡せる場所にあり、刺激を受けやすく、また求めていきやすい環境でした。現在の事業所に移転する際に、**壁向きで刺激の少ない席を設定し、刺激しやすい利用者とは部屋を分けるなど構造化**を図り、落ち着いて過ごせる環境を作っていくように検討していきました。



↑ 移転後の事業所での座席。壁向きにし、刺激を統制。

出勤時間の調整

日中に大声や他害等の行動を起こした際、早退の対応をとることにより最後まで居られないことが頻繁に続いたため、アドバイザーから「早く帰るために行動を起こしていた面も考えられるので、終わりの時間まで居られる経験を積み直していくことを重視した方が良い」と助言を受けました。そのため、**出勤時間を短くして最後まで居られる成功体験を積み上げる**こととしました。最初は終了30分前の15時半の出勤から始めて、徐々に時間を伸ばし、正午過ぎから出勤し、昼食を食べるところから始めるようになりました。

コミュニケーションツール、スケジュール



↑ 気持ちに関するカード

問題行動を起こしてしまう背景には、①**自分の気持ちや要求を上手に伝えられる手段を持っていないこと**、②**自分のやることやスケジュールの見通しが持てていないこと**が考えられました。そのため、問題行動を起こす前に自分の意思を伝えられるよう気持ちに関するカードや、見通しを持って過ごすために1日のスケジュールを用意する取組も行いました。

作業についても決まった作業を行ってもらう方が見通しを持って取り組めるのではないかと考えられたため、Cさんが比較的落ち着いて取り組めていた一貫張り作業を固定して取り組んでもらうようにしました。1回の作業で貼る枚数を決めて台紙に置くようにして、作業が終わったら報告して休憩する流れを設定し、自分から取り組んでもらうようにしていきました。



↑ スケジュール



↑ 一貫張り作業

作業や休憩時の過ごし方の選択

いくつか選択肢を提示して自分が選んだ作業をしてもらうようにしていくことや休憩時間についてもどのように過ごすか選択してもらうなど、Cさんが**自分で選択して考えていくための働きかけ**などに取り組みました。



↑ 休憩時間の活動の例

サポートを受けて変化したこと

〈Cさんや他の利用者〉

当初はCさんの行動により、刺激を受けやすい他の利用者の方が連鎖的に不安定になってしまうことが多くありました。構造化を図り、利用者同士が刺激を受けることが少ない環境作りや、Cさんに対する職員の付き添いの徹底、24ページの取組などに努めていく中で、**連鎖反応を起こすことが少なくなり、お互いに落ち着いて過ごせるようになりました。**

〈スタッフ〉

サポート事業を受けながら、職員会議などで検討を重ねていく中で、

- ① 行動につながってしまう要因などの検討
- ② その要因を取り除いて落ち着いて過ごせるための環境作り(職員の付き添い体制なども含めて)
- ③ ②を行っていくための職員の体制作り(丁度この時期に職員体制の増加を図ることもできたこともありました)
- ④ 利用者とのコミュニケーションを成立させていくための取組などを通して職員同士の連携を図っていけるようになりました。

サポートを受けてみて

現時点で根本的な解決はまだまだ難しく、新しい課題が出てくることも多い状況ですが、このサポート事業を通して、**記録などを行っていく中で問題行動の起きる要因を分析して、そのことに対する支援方法を考えて進めていくことがとても大切なことだと感じられました。**そして、アドバイザーの助言をもとに、構造化を含めて落ち着いて過ごせる環境作りのために必要な支援について検討を重ねていく中で、**事業所の利用者全体の安定に少しずつ繋がられています。**新しい課題が出てきたときも同様に職員間で検討を行って改善に向けた取組をしていけるよう努めていきたいと思えます。

▶ アドバイザーより

最初の相談時から課題となっていた行動が変化してきていましたが、記録を取ってもらいながら、進めていきました。また、課題となる行動についての捉え方や、コミュニケーションを増やしていく事の説明なども、訪問時に話し合いました。

噛みつきなどによる他害行動は、職員さん達を疲弊させるため、まず何とか減らせるようにと考え、家庭との連携(自宅での様子の聞き取り、服薬などの協力や理解など)もお願いし、来所時間の変更など柔軟に対応してもらいました。(ちょうど訪問時に、激しい他害行為のあった際に立ち会えた事と、ご家族にも直接お話しできたことも結果的には良かったと思えます)

現在は、服薬との関係は未確認ですが、他害行為については減少、事業所での作業量は一定になっています。

今後は支援方法を次の段階へ移行するタイミングを見ながら、事業所の日課や集団活動に少しずつ参加していけるようになっていけると思えます。

サポート事業とは

入所施設サポート

通所施設サポート

強度行動障がい支援の
まずはここ！

↓ツバ吐き、物の破壊、噛みつきなどの行動の状況、時間帯について記録。

日付	ツバ吐き		物の破壊		噛みつき等他害		作業内容	備考
	出勤～昼休み (12時過ぎ～13:10)	午後作業～休憩前 (13:10～14:30)	休憩、掃除 (14:30～15:00)	作業再開～帰りの会 (15:00～15:45)				
(月)		職員にツバ吐きを2回する。					一貫張り 1枚ずつ貼るよう促したがあまり取り組めなかった。	
(火)		Sさんが職員に怒っている？など興奮気味になった際に、外に出て植木鉢や上靴を投げたり、自転車を倒したり、職員にツバ吐きを行う。					一貫張り 興奮した後に職員に付き添われて作業を行った。	昼から出勤予定だったが、家でお茶漬けが食べなくなったとのことで、13時半過ぎの出勤になった。
(水)	作業前にB室に入り、Kさんにツバ吐きをしようとした。						一貫張り 一貫張りを促していたが、側に付き添っていなかったからあまり取り組めなかった。	ツバ吐きは当たらなかったが、Kさんがそれにキレてしまい近くにいる利用者をつねってしまうことがあり、Kさんはその後も何度かYさんを蹴ろうとすることがあった。
(木)							読書 本を読むと言って半日ずっと本を読みながら過ごした。	途中トイレにこもることがあったので、開けて様子を見ることもあった。
(金)					職員に付き添われて一貫張りを始めてから、それにやきもちを焼いたのかSさんにちょっかいをかけられてツバ吐きする。その後騒いだOさんにもツバ吐きしたり止めた職員に噛みつこうとした。	休憩前まで読書、休憩後一貫張り	休憩前まではずっと本を読んでいたが、作業再開後職員に付き添われて一貫張り作業を行った。	
(月)							読書 本を読むと言って半日ずっと本を読みながら過ごした。	トイレに行くことが多かったが寝ね落ちるいで過ごしていた。
(火)					ラジオ体操を始める時に職員にツバ吐きした。		読書 本を読むと言って半日ずっと本を読みながら過ごした。	
(水)							読書 時折作業を促すが、結局半日ずっと本を読んで過ごした。	出勤途中でアイスを食べたためか、出勤後すぐに2階に上がりトイレに入ることがあった。
(木)		OさんとSさんが言い合っただけでいた際にOさんの右手首に噛みついた。その後職員の左手首に噛みつき、Sさんの右腕にも噛みついた。					読書	噛みつきがあった後は、他の仲間が2階に行ってもらい難すようにして、A室で職員と過ごしていく中で落ち着いて過ごしていた。

↓ツバ吐き、物の破壊、噛みつきなどの行動のきっかけや条件、その行動による結果を記録。

... ツバ吐き
... 物を壊す
... ツバ吐き、物を壊す両方あり、または他害

日付	時間	場所	場面	直前の条件、きっかけ～したら、～があった(いた)から	行動	結果
例)		スーパーで買い物		お菓子の棚を見て	大声で泣く	お菓子を買ってもらえる
(月)	11時頃	玄関	作業中	見学の来客が多くて騒がしかったから？	見学に来た他事業所の利用者の方にツバ吐き。	謝ってもらった後付き添って様子を見ていく。その後は落ち着いていた。
(火)	11時半頃	1階作業室A	作業中	KさんがAの部屋に来たから？	Aの部屋に来たKさんにツバ吐き。	その後KさんにはBの部屋に戻ってもらったが、今度はYさんがBの部屋に行こうとしたため止める。その後は落ち着いた。
(月)	11時半頃	1階作業室A	作業中	突然大声を出して注意した後	大声を注意した際に職員にツバ吐き。	職員にツバ吐き後頓服を服用してもらおう。しばらくすると落ち着く。
(水)	13時半頃	1階作業室A	作業中	ウロウロしているうさかったOさんを気にして？	ウロウロしてAの部屋に来たOさんに何度かツバ吐き。	その都度注意しながら様子を見る。他事業所から交流研修で職員が来ていたこともあったかもしれない。
(水)	12時半頃	1階作業室A	休憩中	ウロウロしていたOさんを気にして？	Aの部屋でウロウロしていたOさんにツバ吐き。	謝ってもらった後は落ち着いていた
(火)	12時半頃	1階男子トイレ、2階相談室	休憩中	衝動性が表れて？	休憩中にトイレに入り、鏡を割る。その後2階に行き相談室で花瓶を割る。	割った後は拾っていたが、また2階に行つて割ってしまい、その後も割れるものを探している様子があったので家庭に連絡して早退の対応を取る。
(金)	12時前	1階作業室B	作業中	Kさんを急に気にして？	作業終了間際に突然隣の部屋に行き、Kさんにツバ吐き。	Kさんが怒ってしまいすぐに部屋に戻ってもらったが、Cさんも興奮状態になり、大声、噛みつき等行う。家庭に連絡して早退の対応を取る。昨日の健康診断のストレスがあったかもしれないとのこと。
(火)	11時頃	1階作業室B	作業中	Oさんを急に気にして？	作業中に突然Bの部屋に行ってOさんにツバ吐き	謝ってもらった後作業に戻ってもらいその後は落ち着く
(水)	10時過ぎ	1階作業室B	作業中	Kさんを急に気にして？	作業中にBの部屋に行って急にKさんにツバ吐き	利用者が怒ってしまったので2階で作業してもらおう。その後利用者には作品展搬入に同行してもらい離れてもらうようにする。
(金)	14時半	玄関	作業中	作品展見学から戻ってきたKさんが見えたから？	作品展見学から戻ってきたKさんに対してツバ吐き	その後交代で作品展見学に行ってもらい難す。戻ってからも利用者の怒りが収まらなかったので2階に移動してもらい利用者が帰るまで難す。

② あすたす（特定非営利活動法人 P O P O L O）

▶ 事業所の基本情報

事業形態	就労移行支援 就労継続支援 B 型	定員	20人
------	----------------------	----	-----

▶ 対象者（Dさん）の基本情報

性別	男性	年齢	20代前半
月の契約日数	23日	月の利用日数	23日
事業所の利用年数（サポート事業利用開始日時点）		0年（1か月）	

課題となっていた行動

- ・衝動的な感情を抑えることができず、他者へ攻撃的に振舞ってしまいます。
- ・相手や状況に合わせた行動が苦手です。
- ・物事の優先順位が分かりません。

▶ 通所施設サポートについて

サポート利用期間 1か月（令和元年10月2日～令和元年10月28日）

サポートを受けようと思ったきっかけ

障がいを持つ人への偏見を無くしたく、一人ひとりと向き合い適切に支援し、その人にとって当たり前の日常生活を守っていくためにはどうしたらよいのかという思いが、スタッフの共通点であったためです。

サポートの経過

サポート事業開始第1回目会議で、Dさんの課題（問題）となっている行動特性について情報共有を行いました。

協議の結果、Dさんは先の見通しが立たず、初期段階では複数人で作業をする
と不安になるため、①**複数の指示を出さない**、②**十分な作業スペースを確保する**、
③**施設側で作業量を調整し、一人でもできる作業や活動を増やす**といった対応を
行うこととしました。

全体指示後にDさんの動きが止まってしまったときには、個別に言語指示を行
う方針を取りました。また、衝動的な行動が予想されるため、①**禁止や強い指示
を出さない**、②**必ず支援員から指摘を行う**、③**課題（問題）行動後の指導はご本人
の安定後に行う**こととしました。

アドバイザーからは、**支援員全員で情報共有を行い、上記のルール・対応を統
一することによって支援体制を構築していく**ことを助言していただきました。

その後、約1ヶ月間の様子を踏まえ、サポート事業は終了し、今後必要に応じ
て相談をする方針となりました。

サポートを受けて変化したこと

〈Dさん〉

- ・ Dさんの特性に応じた対応を行うことで不安が減り、安定した日中活動を行い、生活リズムの安定を図ることが出来ました。
- ・ **自分がこれから何をするのか、事前に分かりやすく伝えることで、不安感が減り、同様の手順を積み重ねることで別の場面でも落ち着いて過ごすことが出来るようになりました。**



↑初詣をしているDさん

〈スタッフ〉

- ・ サポート事業を通し、**Dさんだけではなく他の通所している利用者様にも応用可能な助言もあり、支援能力が向上しました。**
- ・ 利用者様のために、支援方法について考え続けること、思い続けること、これでいいのか、他に方法はないのか、と、これからもずっと試行錯誤しながら考え続けていきたいと改めて思うようになりました。



↑飲料の納品作業をしているDさん

サポートを受けてみて

強度行動障がい者という特別な支援が必要な方に対し、個別にどのような支援が必要なのか助言をいただけたことが支援を行う中で大きかったと感じています。

サポート事業がないと支援者から見て理解が及ばない対象者の行動に戸惑い、疲れ、孤立してしまいます。

サポート事業があるおかげで、**理解しづらい行動も本人が思いを伝えることが困難なときや不安、コミュニケーションのすれ違いから生じているのだと支援者の理解も進みました。支援方針も常に観察と記録を行うことで、ちょっとした変化に気付くことができ、ご本人により寄り添った、長所を引き出すことができるプランを作成することが出来ました。**

支援者側の立場としては、つい言い訳をして理由付けをしてしまうような事例がたくさんありますが、日々「考え続ける」ということを頭に置き、より適切に支援するための努力を続けていくことを大切にしていきたいと思えます。



↑レクリエーションで調理をしているDさん

▶ アドバイザーより

通所事業所を新しく利用するタイミングで関わるようになりました。

Dさんの特性、得意なこと、苦手なこと、支援方法などを利用する前にお伝えするところから始めました。

利用が始まってからは、課題となっている行動や対応に困っていることを確認し、支援の修正などを行いました。

Dさんが事業所を利用する前から関わることができ、情報の共有ができた事でスムーズに利用することができました。

↓ 調理実習後、お食事をしている利用者様の様子



③ もえり清水（特定非営利活動法人 もえり）

▶▶ 事業所の基本情報

事業形態	放課後等デイサービス	定員	10人
------	------------	----	-----

▶▶ 対象者（Eさん）の基本情報

性別	男性	年齢	特別支援学校 高等部
----	----	----	------------

月の契約日数	8日	月の利用日数	8日
--------	----	--------	----

事業所の利用年数（サポート事業利用開始日時点）	7年
-------------------------	----

課題となっていた行動

自宅でも事業所でも、一つ一つの行動に対して確認行動があります。自宅では保護者が確認行動に対し対応しないと、他害行動につながることもあります。当事業所においては、着替え・トイレ等の日常生活の行動をはじめ、当事業所で行う個々の活動においても、同様に確認行動が多くみられていました。

▶▶ 通所施設サポートについて

サポート利用期間 3か月（平成30年11月19日～平成31年2月18日）

サポートを受けようと思ったきっかけ

保護者の方からEさんの自宅での様子をお聞きし、何か良いサポートができないかと考えたからです。また、保護者の方からも自宅の様子も含めてアドバイスをいただきたい旨のお申し出がありました。

サポートの経過

まず、アドバイザーには、Eさんの通っている他事業所でEさんの普段の様子を見ていただきました。次に、ご家族の同意を得て、ご自宅での生活の様子を見ていただき、生活の動線や家庭での様子を確認いただきました。（当事業所においては、日程が合わず訪問できなかったため、聞き取りをしていただきました）

アドバイザーからは、①家庭において保護者の方によるEさんの行動への介入が多すぎるのではないかと、②介入せざるを得ない動線となっているのではないかとご指摘いただきました。

その対応として、**Eさんにわかりやすい要点のみを示したスケジュール表作成と、登校前・帰宅後の行動が明確になるようご自宅の動線の工夫**をしました。スケジュールに関しては、着替え・朝食・学校・放デイ・帰宅など、余計な要素のないものにしていただきました。

当事業所においても、**来所後の行動について、簡単に明確なスケジュールを作成し提示**しました。それでも、Eさんから確認行動があった場合は、スケジュール

ル表を指差しし、Eさんに行動していただけるよう促しました。なるべく言語のやり取りを少なくすることで、スケジュールが理解しやすくなるのではないかとアドバイスいただいたのでスタッフも言語支援を控えるようにしました。

他の事業所では、ご家庭と同じでスタッフの介入が多く見られるため、**自ら行動していただけるよう当事業所と同じようにスケジュール表を作成していただきました。**

サポートを受けて変化したこと

〈Eさん〉

簡単なスケジュールにしたこと、動線を明確にしたことにより、朝の支度や帰宅後の行動がスムーズになり、確認行動が少なくなってきました。当事業所においても、同じく**確認行動は軽減され、スタッフの指示も入りやすくなり行動がスムーズになりました。**

〈スタッフ〉

スケジュール表はなるべく保護者が作成したものに近いものにしました。また、言語による支援と視覚支援など同時に支援することはなるべく控えていますが、まだ同時に支援してしまうこともあり、その際、Eさんが混乱していることを再確認しました。

サポートを受けてみて

サポート事業を利用し、当事業所にとっては、Eさんや保護者の方の変化も感じることができましたし、**スタッフの意識改革をさせていただけたことが大きな収穫**だったと感じています。

また、事業所内では非常に落ち着いた行動ができていても、家庭内で問題行動があるケースも多いと感じています。今後、家庭支援に関しましてもご協力いただけると助かる保護者の方もいらっしゃるのではないかと思います。

ありがとうございました。

▶ アドバイザーより

放課後等デイサービス事業所2か所、居宅介護事業所（移動支援含む）1か所、学校、家庭それぞれから話を伺ったり、様子を見させていただいたりしました。

Eさんの特性から支援の方法を見直していただき、「一人でできる活動を増やす」「刺激の多いかわりを減らす」「ご本人がわかる方法でスケジュールを提示する」この3点を主に取り組むようにしていただきました。また、自宅、事業所での動線を見直していただき、シンプルにわかりやすくしていただきました。

定期的に事業所に伺い、ご家庭での様子も確認し、修正が必要なところは修正するようにしていただきました。

Eさんが自信をもって活動することができるようになり、課題となっている行動が少なくなってきたように思います。

家庭、事業所が統一した支援を行うことでEさんの混乱も減っていったと思います。

④ やんちゃりか（特定非営利活動法人 たからじま）

▶▶ 事業所の基本情報

事業形態	放課後等デイサービス	定員	10人
------	------------	----	-----

▶▶ 対象者（Fさん）の基本情報

性別	男性	年齢	特別支援学校 高等部
----	----	----	------------

月の契約日数	4日	月の利用日数	4日
--------	----	--------	----

事業所の利用年数（サポート事業利用開始日時点）	0年（7ヶ月）
-------------------------	---------

課題となっていた行動

職員に対して、頭突き・アームロック・髪を引っ張る、他利用児を押すなどの行為があり、大きな声を発して室内を走る行動を他利用児が怖がっていました。いっどんな行動をするのか予測がつかない状況下、トイレ、着替えの同行が必要なため男性職員が主に対応していましたが、その職員への執着が見られました。

▶▶ 通所施設サポートについて

サポート利用期間 1年8か月（平成29年1月25日～平成30年10月3日）

サポートを受けようと思ったきっかけ

Fさんの受け入れのため、利用開始前に、以前利用していた事業所、今回から利用する他事業所との事前の話し合いに参加し、情報共有を行いました。また、利用開始後も、学校も含めた関係機関の情報共有をしながら、数か月過ぎましたが、当事業所がFさんにとって安心して過ごす場所となっていないと感じていました。

対応している職員に対して、髪匂いの嗅いだり、腕を組んだりする行為や突然の頭突き、アームロックなどの他害がなくならず、職員は疑問や不安を抱えながらもマンツーマンの対応をしていました。Fさんの要望や気持ちが変わらず、現状の対応、支援でよいのか悩んでいました。

サポートの経過

- ① 他害の対象となる職員はご本人から見えない場所にいる
- ② 頭を嗅ぐ、叩く、蹴る等の体に触れる行為はさせないよう離れる
を徹底しました。当初、他害の対象となっていた職員は、他利用児と外に遊びに行くようにし、Fさんは他害の対象でない職員と1対1で過ごし、イライラが始まった際は、他害ができないように職員はFさんから距離をとるようにしました。また、
- ③ できることは1人でやっていただき、不要な刺激を排除する（更衣室では一人で着替える等）
- ④ 理解している言語で端的に伝える（声掛けは単語で「指さし」で伝える等）
- ⑤ Fさんのクールダウンの場所を作ること
を実行しました。Fさんがイライラしてきたとき、自分からクールダウンの部屋に行くことができるように、普段から決まった場所に誘い、そこでは居心地良く過ごせるように支援しました。

サポートを受けて変化したこと

〈Fさん〉

- ①、②を実行することで、人に対しての頭突きなどの行為はなくなり、元々他害の対象となっていた職員への執着もなくなりました。
- ③、④の実行により着替え中分からなくなると更衣室のドアを開け、次に何をしたら良いかを教えてほしいことを伝えてくるので指差しで示しています。服やズボンを前後ろに着てしまうことがあります。直すことを伝えるとできるようになりました。
- ⑤クールダウンができる部屋は事業所に都合の良い場所がなく、更衣室に誘いましたが、Fさんが自分で決めた居心地のいい場所は、みんなが座るテーブルの一角でした。その場所で、シール貼り、色分け、ビーズなど自分で選んで過ごす時間が作れました。イライラしたとき、その場所でテーブルの脚を蹴ってイライラしていることをアピールしますが、我慢もできその場で落ち着くことができるようになりました。

〈スタッフ〉

逃げることも他害を成功させない支援の1つだということを知り、その場で対応しなくてはいけないという思い込みがなくなり、視野が広がり、支援に前向きになりました。

サポートを受けてみて

支援者が肉体的にも精神的にも健康な状況で利用者に関われる大切さを実感しました。困り事があるとどうしてもそこだけを見てしまいます。サポート事業を受け、自分たちが冷静になり客観的に観察できるようになれば、解決、良い方向に向かえると思いました。

▶ アドバイザーより

サポート事業でかかわる前から情報提供等がかかわりがありました。障がい特性、得意なこと、苦手なこと、支援方法などをお伝えしてありました。ただ、実際に支援している場面を見てもらったりしていなかったため、不十分だったと思います。

サポート事業でかかわった時は、課題となっている行動（問題行動）、スタッフが対応に困っている場面などを出していただき、考え方やどのように支援したらよいか、実際に支援している様子を見てもらうようにしました。

他害については、他害行動がでないように環境設定をしてもらうようにしました。Fさんの場合、他害行動の機能は特定されていたため、機能の説明をしました。他害行動が出てしまった場合、「力で抑え込まない」、「他害を成功させないように避ける、離れる」などをしてもらうようにしました。

コミュニケーションについて、言語でのやりとりが苦手でしたので、写真、カード、タイマー、指差しなどを使い、端的に指示、何をしてほしいのか、はっきり示すようにしてもらいました。私たちは、どうしても「説明して、理解してもらおう」と思い、多くの「はなしことば」を使ってしまいます。「はなしことば」で理解する事が難しい人にとってはメッセージをきちんと受け取ることができません。メッセージを受け取ってもらうためには、ご本人がわかる「ことば」（カード、文字等）で伝え、一度に伝えることができる「量」を知っている必要があります。

切り替えの場面や活動を終わらせることができないなど課題が残ってしまったこともありました。

コンサルテーションで見えてきた 強度行動障がい支援のまずはここ！

自閉症教育・支援コンサルタント みずの あつし 水野 敦之
(入所施設サポート コンサルタント)

穴原荘、わらしな学園の2施設がサポート事業で
コンサルテーションを続けてきた中で、良い効果が
少しずつ増えてきています。

「なぜ効果があがるのか？」という視点を紹介
します。

▶ 冰山モデルの視点で整理する

気になっている行動に対する介入でまずやるべきではないのは、その行動に対して思いつきや勘で支援することです。もっと怖いことは気持ちや感情で支援することです。思いつき、勘、気持ち、感情での支援は、良い方向にいかないだけではなく、合理的配慮から遠い支援になり、さらには虐待へのリスクが高まります。

そうならない支援のためには、**チームで共通のフレームワーク（考える枠組み）を持つことが大切です**。そこで出てくるのは**冰山モデルの視点**です。

冰山モデルの視点は、自閉症の人、強度行動障がいになっている人の行動を冰山の一角に置き換え、**その行動に着目するのではなく水面下の要因に着目していく**ものです（38ページ参照）。

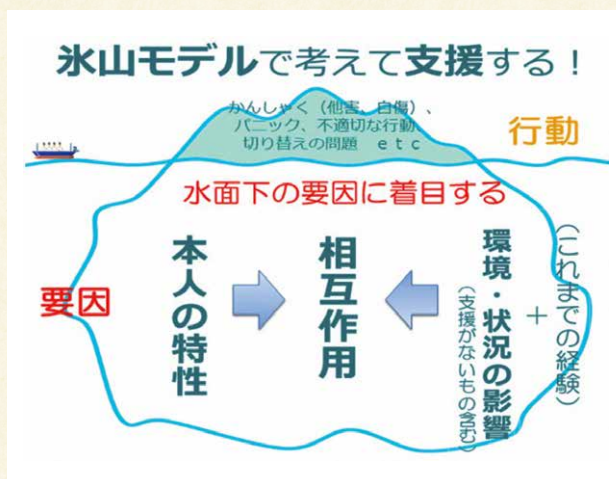
書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』※11では、瞬時にまたは計画的に、その行動の背景になる要因である『本人の特性』や『環境要因』、『本人の気づき』などから困難さを補う支援と本人に合わせた環境調整を計画し実施し、さらに調整していくことを冰山モデルシート（39ページ参照）で進めることをおすすめしています。

この事業でのコンサルテーションでは、冰山モデルシートを活用して、上記の要因を整理することをやっています。書き出すことのメリットは2つです。

1つは、考察、整理がしやすくなることです。もう1つ大きいのはイメージしていない要因やその時点でない本人の情報（例えば、本人が何によって終わりを理解するか？）がわかることです。

書き出さない支援は、やはり思いつきで実施し、必要な情報のアセスメントをしないまま計画を立ててしまいます。

冰山モデルシートを使えば、すぐに解決策が見えていくわけではありません。継続的にシートを使ってアセスメント、計画と調整を続けていきます。



※11 書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』 水野敦之著／エンパワメント研究所

冰山モデルで考える自立支援と行動支援

(要因になる特性 × 環境・状況 × 気づき・記憶)

自立が難しい・般化が難しい

課題になっている行動・考え方

【要因となる環境・状況】

- 様々な状況の変化
 - ・ 予定、人、物の配置などの変化
 - ・ 習慣になっていることの変化
 - ・ 今まであったものが無くなる など
- 影響を与える刺激や情報
 - ・ 様々な刺激がある
 - ・ 様々な情報が見える・聞こえる
 - ・ 複雑でわかり難い指示・情報
 - ・ 複雑でわかり難い環境
 - ・ 関係のない刺激や情報 など
- 必要な支援がない
 - ・ 必要な指示がない
 - ・ 終わり等が提示されていない
 - ・ 見通しが提示されていない
 - ・ 本人にあった指示ではない
 - ・ 注目できにくい指示になっている
 - ・ 環境が整理されていない
 - ・ 物や本人の場所の提示がない
 - ・ 代替コミュニケーションがない
 - ・ 刺激が統制されていない など

【要因となる自閉症の特性】

- 受容コミュニケーションの特性
 - 言語指示の理解の困難さ、字義どおり理解する、言語指示を整理してつかむことができない など
- 表出コミュニケーションの特性
 - 無言語、エコラリア^{※12}、声の調子やリズム、意思交換の困難さなど
- 社会性・対人関係の特性
 - 一人であることを好み、アイコンタクトやジョイントアテンション^{※13}、セオリ・オブ・マインド^{※14}の困難さ、自発的にかかわりをもつことの困難さなど
- 転導性・衝動的な注意・注目の特性
 - 転導的・衝動的な行動、切り替えの困難さ注目することの困難さなど
- 時間の整理統合の特性
 - 日程の計画や調整、活動や手順の調整、実行機能の困難さなど
- 空間の整理統合の特性
 - 自分の位置や材料や道具の位置の調整、1つの場所の多目的利用の困難さなど
- 変化の対応の特性
 - 場所、物、人、予定、習慣の変化の不安・抵抗、強迫的な行動、ルーティンの必要性など
- 般化の特性・関係理解の困難さ
 - 習得したスキルや人や物への対応を他の場面、違う文脈で状態が変わる。材料・場面・指導者が変わったときに課題を遂行できない。関連づけしすぎる、自己流の解釈、字義どおりの解釈、絵などを具体的にとりすぎる。など
- 記憶の維持の特性
 - 短期記憶・作業記憶の維持の困難さなど
- 長期記憶の特性
 - 長期に脳に維持される記憶、経験した記憶が消せない特性など
- 感覚の特異性
 - 視覚刺激、聴覚刺激、味覚刺激、嗅覚刺激、触覚刺激などによる反応、または鋭敏さ、鈍感さ など
- 微細運動・粗大運動
 - 手と目の協応の困難さ、手先の不器用さ、緊張のある動き、柔軟さのない体全体の動きなど

【要因となる本人の気づき・記憶】

- 習慣になっているものがある
 - いつもと同じ流れ、習慣があり修正が難しい内容。例えばパターン化された生活になって変更が難しいこと
 - 自分流の気づき・考え方をもつ
 - 物事の関連付けやルールなどを自己流で解釈している内容
 - 過去に経験したことや学んだことを修正できない
 - 過去の体験や人から教えてもらったことで修正が難しい内容
 - 過去に経験したことにより恐怖や嫌悪感がある
 - 過去の経験を思い出しパニックになったり、混乱や恐怖・嫌悪感による様子が見られる など
- ※ フラッシュバックもこの項目に入ります
※ 誤学習した内容もこの部分に入ります。

相互作用

影響

指導・支援計画

- ・ 本人が理解できる視覚的な情報で伝える
- ・ 本人が学習・活動しやすい環境設定にする
- ・ 影響をうけている刺激・情報を統制する
- ・ 場所、課題の境界を明確にする
- ・ 生活シナリオの見直しをする
- ・ 情報の量を調整する
- ・ 情報を整理して伝える
- ・ 見通し、終わりなどを視覚的に伝える
- ・ 材料や道具を容器などで整理して提示する
- ・ 代替コミュニケーションやリンマインダーを準備し教える
- ・ 経験させないように工夫する
- ・ 他の活動を充実させる
- ・ 習慣を活用する
- ・ 機会を設定する
- ・ 自分の考えや他の人の考えを表にして整理する など

活用する・参考にする

【活用できる資源】

- すでに活用している手だて
 - エリアの設定、スケジュール、手順書など
- 活用しているサービス、事業所
 - 療育機関の利用、通院場所、福祉サービス など
- 学校や事業所で活用できるエリア・設定
 - 1対1の勉強のエリアがある、現場実習先がある など

【活用できる本人のスキル】

- 理解できている情報(具体物・写真・文字など)
 - 具体物、写真、絵、単語、文字、色、形 など
- 持っている概念
 - フットイン、1対1の対応、回数、時間、お金など
- 持っているスキル
 - 日常生活動作、道具の使い方、職業スキル、余暇スキル など

【活用できる本人の気づき】

- 身についた習慣がある
 - 終わりの・first~then~の習慣、ルーティンの活用ができる など
- 学んでいる情報、知識
 - 知っている意味や概念、情報 など
- 他でも活用できる本人の考え方
 - 他人の物は許可を得てから使う など

参照資料：『フレームワークを活用した自閉症支援』 / 水野敦之 著・エンパワメント研究所

※12 **エコラリア** 反響言語。他者が話した言語を繰り返して発声すること。

※13 **ジョイントアテンション** 共同注意。他者と同じものに注意を向け、情報を共有・伝達すること。

※14 **セオリ・オブ・マインド** 心の理論。前後の流れ、周囲の状況、言語、非言語コミュニケーションによって、相手の気持ちを推測すること。

氷山モデルシート (WS009) Ver.2 +ガイド付き

氏名：	日付： / / ()
	記録者：
行動目標：	

課題になっている行動（気になる行動）		

環境・状況の要因	本人の特性	本人の経験や気づきの影響
<input type="checkbox"/> 様々な状況の変化 <input type="checkbox"/> 影響を与える刺激や情報 <input type="checkbox"/> 必要な支援がない <hr/> <input type="checkbox"/> 行動前の状況 <input type="checkbox"/> 行動後の状況・結果 <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 受容コミュニケーションの特性 <input type="checkbox"/> 表出コミュニケーションの特性 <input type="checkbox"/> 社会性・対人関係の特性 <input type="checkbox"/> 全体よりも細部に注目する特性 <input type="checkbox"/> 時間の整理統合の困難さ <input type="checkbox"/> 空間の整理統合の困難さ <input type="checkbox"/> 関係理解（意味理解）・般化の困難さ <input type="checkbox"/> 想像思考の困難さ <input type="checkbox"/> 変化の対応の特性 <input type="checkbox"/> 感覚の特異性 <input type="checkbox"/> 微細運動・粗大運動 <input type="checkbox"/> 記憶の特性 <input type="checkbox"/> その他	<input type="checkbox"/> 習慣になっているものがある <input type="checkbox"/> 自分流の気づき・考え方をもつ <input type="checkbox"/> 過去に経験したこと学んだことを <input type="checkbox"/> 過去に経験したことにより恐怖や嫌悪感をもっていること

活用できる他の資源	活用できる本人のスキル	活用できる本人の気づき

支援計画		
※支援の具体的な計画は自立課題シートで整理する方法もあります		
環境を変える部分は？	本人の特性にあわせた支援は？	本人に伝える・教える部分は？

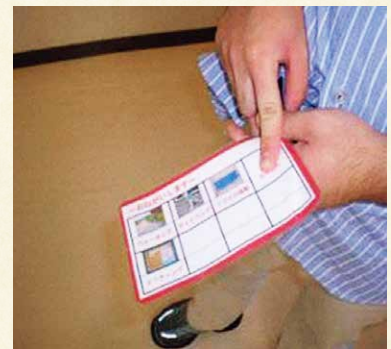
実施後の記録		
日時	本人の様子	再構造化・再計画の指針

※書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』（104～105頁）を参考に記入してください。 検索「自閉症 フレームワーク」

▶ 個別化したコミュニケーションの計画

多くの自傷や他害などの課題になっている行動は、受容コミュニケーションと表出コミュニケーションの困難さが要因としてあげられます。※そうでないものもあります。

周囲の状況と見通しを本人が理解できる形で伝える受容コミュニケーションのサポート、また本人に合わせた**自分の気持ち、情報を伝える方法を準備する表出コミュニケーションのサポート**が必要になります。まずは、ここからです。本人にあった環境にあわせて、本人の理解できる見通しと本人の気持ちを伝える方法を準備し教えることが具体的な行動支援の第一歩になります。



▶ 見通しのある具体的な活動の設定

行動支援で構造化などの支援や環境設定は大切になります。しかし、それは前提であり、土台であり、補助具でもあります。構造化や環境設定だけでは、おそらく行動面の課題は解決しないと考えます。

どんなに視覚的なスケジュールやTODO表示、活動の手順書があっても、それを使って伝える生活内容、つまり具体的な活動が無いと意味がありません。

具体的な活動の設定でまず浮かぶのが、本人の興味関心から始めることです。しかし、多くの支援者が興味関心から始めてもうまくいきません。興味関心がそもそも見つからないと、そこから発展することが難しいのです。

今回、この事業でコンサルテーションをさせていただいた2つの施設では、興味関心にこだわらず、**様々な活動のアセスメントから本人の『できる部分』を活用し、もう少しいける部分は構造化を活用して教える実践**をしてもらいました。結果、目で見てわかる形で以前よりも活動の広がりがでて、そして行動面での安定につながっています。

▶▶ 境界の明確化は自信を持った行動につながる

今回の事業でのコンサルテーションで繰り返しアドバイスさせていただいたのは、**境界を明確にすること**でした。どこからどこまでが関係のある部分でどこからどこまで関係のない場面かという空間の境界（**空間の整理統合**）、今の活動はこれで、この後はこれという時間の境界（**時間の整理統合**）、これらを明確にすることが見通しをもった行動と自立につながることは2つの施設の実践を見るとわかります。

境界が不明瞭であれば、見通しを持ってないし、自信をもってできません。境界があれば自信を持ちますし、自立的な行動とその広がり(QOLの広がり)につながります。

▶▶ チームの協働を支える明文化とフレームワーク

支援チーム間で重要なことは、**アセスメント内容と支援の方向性を共有**することです。そこが揺らぐとチームでの支援がうまくいきません。本人に混乱を与えます。アセスメント内容と支援との共有は口頭での伝達では不可能です。そこに視覚的な媒体が必要になります。**支援チームでの構造化、視覚的支援が必要**です。

今回の事業での2つのコンサルテーションでは、**フレームワークシート**※15を使った**アセスメントとプランニングと実践を通じた調整**を実施していただきました。フレームワークシートがあることで、情報の共有だけにとどまらず、ディスカッションの材料やうまくいっていない部分の再調整にもつながっています。

トピック フラッシュバックの対応

強度行動障がいを持つ方の中には、過去の経験を思い出して痼癪となるようなフラッシュバックを起こす方がいらっしゃいます。特に自閉症の特性を持たれる方は過去の経験をまるで今経験しているようにフラッシュバックを起こされます。頭の中の消せない記憶が要因ですので、支援としてもハードルが高くなっています。私のこの十数年での取組の中で皆さんにご提示できる3つのサポートを紹介します。

- ① 生活全般で活動の充実、生活シナリオの広がりを具体化する
- ② 生活全般で「まずは○○」「終わったら次は○○」という情報を伝える
- ③ 生活全般で空間の境界、時間の境界を明確に伝える

この3つを実施すればすぐ状況が変わるわけではありません。しかし一番の近道です。

『**フレームワークを活用した自閉症支援**』について、詳しくはホームページ、SNS、YouTube等をご覧ください。

🔍 自閉症 フレームワーク 検索



WEBサイト



YouTube

※15 **フレームワークシート** 書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』に掲載。

おわりに

サポート事業を通して行動に課題のある方への支援に取り組む施設をご紹介しました。

どの施設においても、利用者の方のことを第一に考え、その方が自分でできることを増やせるようサポートし、安心して暮らせるように支援に取り組んでいます。

1人1人の支援者の皆様に、こうした取組やサポート事業を知っていただき、まずは一歩を踏み出すきっかけとなれば幸いです。

利用者の方のため、そして支援者の皆様のために、ぜひサポート事業や行動障がい支援に関する各種研修をご活用ください。

本冊子の内容やサポート事業の利用に関するお問い合わせは、以下までお願いします。

静岡市 保健福祉長寿局 健康福祉部
障害福祉企画課 地域生活支援係

〒420-8602
静岡市葵区追手町5-1

TEL 054-221-1198

FAX 054-221-1494

**行動に課題のある方への支援により高い専門性を
— 市内で安心して暮らし 自立を目指すために —
静岡市強度行動障がい者支援施設等サポート事業成果報告書
(令和3年3月)**

(発行) 静岡市保健福祉長寿局健康福祉部障害福祉企画課

〒420-8602 静岡市葵区追手町5-1

TEL 054-221-1198 FAX 054-221-1494